

1 地域で顔の見える関係を構築するために

文京区青少年問題協議会（以下「青少協」という。）は、平成16年2月に策定した「はじめの一步！（文京区青少年育成プラン）」（以下「プラン」という。）において、青少年健全育成のための具体的な行動のきっかけとなる「あいさつ・声がけ・きっかけ作り」（以下「あいさつ・声がけ」という。）を重点行動として位置づけた。

ここの「あいさつ・声がけ」は、礼儀あるいは日常生活における習慣としてのあいさつにとどまらない。折り目正しい気持ちのよいあいさつは、する側とされる側の心を開き、人間関係を円滑にするための行為であるとして、あいさつ・声がけが「きっかけ」となって生まれる地域内でのコミュニケーションを通じて、青少年の成長にとって望ましい人間関係が築かれることを目指していく。

プランの趣旨に基づく青少年健全育成施策の充実を図るため、青少協は「はじめの一步！」推進部会（以下「部会」という。）を設置し、平成17年2月の報告において「地域活動への参加を通じたコミュニケーション能力の向上」の項目を第一番目に掲げて、地域で顔の見える関係の構築について提言を行った。

しかしながら、子どもたちを巻き込む事件の多発や、ライフスタイルの多様化、住民意識の変化による近隣への関心の低さなど、様々な要因により、ややもすれば地域における人間関係が閉鎖的で希薄なものとなり、「あいさつ・声がけ」を展開していく上での障害となっている。最近小学生が犠牲になる痛ましい事件が相次いでいるが、犯罪予防の面からも、子どもたちにとって、地域でできるだけ多くの顔見知りがいるということは極めて重要なことである。

こうしたことから、部会では主にアンケート調査や部会員の情報交換等により「あいさつ・声がけ」に関する地域団体の現状や区民意識、子どもたちがおかれている状況などの把握に努めた。その分析に基づき、「あいさつ・声がけ」をきっかけに、次代を担う青少年の健やかな成長の芽を地域全体で見守り育てていく環境をつくるための具体的な取り組みについての検討を行い、その結果について報告するものである。

2 「あいさつ・声かけ」の現状・区民意識 ～子どもたちを取巻く状況と対応策

(1) 家庭において

親、おとな同士できっかけを

町会やPTAを対象とした「あいさつ・声かけ」に関するアンケート（参考資料1）（以下「アンケート」という。）に対する回答にもあるように、子どもたちがあいさつについての意識を持つためには、家庭での躰（しつけ）、親子の会話が果たす役割が非常に大きいと考える。普段から子どもと共通の話題づくりを心がけ、自然に何気ない会話ができる雰囲気が家庭において求められている。

また、子どもは、知っているおとなには安心してあいさつをすることができる。プランが「おとなの意識改革」を強く呼びかけているように、周囲のおとながまず率先してあいさつをすることを心がけることが重要である。日常的に親同士、おとな同士がコミュニケーションを図りながら、「あいさつ・声かけ」を実践して、子どもの手本になるとともに、地域での交流の輪を広げていくことが求められている。

そのためには、普段から家族、親子で地域や学校で開催される事業に積極的に参加をするなどして、限られた人間関係の中だけではなく、様々な立場や年齢層の人たちとの交流に努め、幅広い人間関係を築いていくことが必要である。

(2) 学校において

安全教育とのバランスのなかで

学校では、コミュニケーションの手段、きっかけとして、あいさつをすることを子どもたちに指導している。会釈でもよいから自然にあいさつができること、また校内に限らず、家庭、地域においてもきちんとあいさつをするように指導するなど、その重要性をいろいろな場面で子どもたちに伝えていくよう取り組んでいる。その結果、多くの学校で生徒や先生の間ではもちろん、来校者に対しても、気持ちのよいあいさつの声が聞こえるようになってきている。

しかし、学校内では積極的にあいさつができるものの、一步校外に出るとあいさつがしにくくなる現状があり、これには、アンケートの回答にあるように、最近子どもたちが巻き込まれる事件や犯罪が多発していることから、子どもたちに限らず、親たちも過敏になっていることが要因として考えられる。

学校では、「セーフティ教室」などの安全教育に力を入れながら、一方で学校が閉鎖的領域とならないように、地域の人たちと健全な人間関係を築いていくための指導を行っている。

(3) 地域において

地域団体からの積極的な働きかけを

アンケート結果を見ると、「あいさつをしたくても、警戒されてしまうからなかなか難しい」など、地域団体としてその重要性は認識しているものの、具体的に行動しづらいというもどかしさを読み取ることができる。また、平成 15 年 12 月に実施をした「第 19 回文京区政に関する世論調査」（参考資料 2）では、青少年を社会全体で育成する意識が高い反面、実際には地域の子どもたちとの関わりが薄いという実態が浮き彫りにされている。さらに、(1) で触れたように、子どもとその親などが、見知らぬ人や普段の交流がない人から声をかけられることに対して、不安や警戒心を抱いてしまうといった現状から、日常的に地域で「あいさつ・声かけ」を実行するという事はなかなか容易なことではない状況である。

子どもに対しては、初めのうちは、声をかけてもあいさつを返せない子どももいるが、何度か会って繰り返すことにより応えてくれる。まずは、地域のおとなが積極的にあいさつをする意識を持つことが必要であり、子どもたちの方から勇気を出してあいさつをしてきたときには、おとながしっかりと受け止め、応えていくことが必要である。

また、アンケートの結果によると、複数の町会において、事業実施のとき、あるいは交通安全週間やラジオ体操の活動に携わったときに、子どもたちやその家族と、あいさつを通じてコミュニケーションを図ることができたことを大きく評価している。このように、町会をはじめとした地域の各団体に関わる事業などへの参加と、そこでの「あいさつ・声かけ」の体験が、地域と家庭を結びつけるパイプ役となっているということは非常に重要なことである。

各団体ともこの「地域と家庭のパイプ役」という意識を重視しながら、事業の企画、運営を行い、より多くの家庭、子どもたちに参加を呼びかけていくこと、さらには区内で広域的に実施される事業への参加の際に、積極的に「あいさつ・声かけ」をすることが求められる。

3 区内における先駆的な取り組み

～学校と地域の連携を中心に

すでに区内の小中学校において「あいさつ・声がけ」について、取り組みを始めているところがある。

区立林町小学校では学校、PTAと地域団体が連携をして、10月に2週間の期間を設けてあいさつ運動を実施した。この運動では、学区域内の6町会と青少年対策地区委員会（以下「地区対」という。）の協力を得て通学路の民家、店舗などにも呼びかけて、延べ1,500人で活動を行った。運動に参加したおとなが目印として手首に着ける黄色いゴムヒモは、たった一本のゴムヒモであるが、子どもたちに安心感を抱かせる一方で、おとな同士の連携やあいさつに対する意識の向上に役立つなど、大きな効果を発揮している。

更に事例をみると、数校において登校班が当番制で校門に立ち、児童、生徒にあいさつを行っているほか、ある小学校では、近隣の中学校と連携をしてボランティア清掃を行いながら、中学生がリーダーとなってあいさつや掃除の作法を指導している。更にはある小学校では、区で作成したパンフレットを活用して、児童が顔見知りの人や来校者にあいさつを行うようになったとの事例もある。

学校外では、犬の散歩時間を利用して、地域の方々が通学途中の子どもたちの安全を見守りながら「あいさつ・声がけ」をする、いわゆる「わんわんパトロール」が区内において広がりを見せている。また、広報紙に「あいさつ～心ふれあう豊かな町づくり」という標語を掲げて地域の方々の意識の向上を図っている町会がある。更には、区立幼稚園のリサイクル活動に近隣の方々が協力し、PTAと住民のコミュニケーションが図られているという事例も報告されている。

4 今後の効果的な啓発への取り組みについて

(1) 方向性

①全区的な運動の実施

区内全域での、統一的、継続的な取り組みが必要である。このため、できるだけ多くの団体や機関に参加を呼びかけ、地域に根付いたものとしていくことが重要である。そのためには、各々の団体や機関が活動の趣旨や目標を認識し、積極的に参加できるような仕組みを構築していくことである。また、区内で実施されている、既存の広域的な運動との連携を図っていくことも重要である。

②地域性や団体の特性を活かした事業実施

一方、区内それぞれの地域においては、地域や学校の状況、団体の特性をうまく活かした事業を展開していくことが求められる。

各団体、実施主体が協力、連携することにより、それぞれの特性を発揮して、さらに効果的な活動の展開を図ることが可能になる。また、事業実施に際しては、先駆的な活動をテストケースとして、地域にあったものを考えていくことが有効な方法と考えられる。将来的には、各団体の活動のネットワーク化を実現して、全区的な運動へと発展していくべきである。

(2) 具体的な進め方

①全区的な既存事業との連携

運動を効果的に進めるためには、区内全域で時期と方法を統一して展開をすることが必要であり、交通安全週間など既存の広域的な事業と連携することが有効であると考えられる。アンケートの回答にも見られるように、交通安全週間は町会の関係者をはじめ大勢のおとながかかわっており、子どもたちとのコミュニケーションが図られる機会ともなっている。このことに着目をして、交通安全週間に携わることができるだけ多くのおとなの側から、子どもに対する声かけを行うことにより、全区的に「あいさつ・声かけ」運動を盛り上げることができる。

〔具体的な取り組みの例〕

- ◇交通安全週間におけるあいさつ・声かけの提唱。
- ◇あいさつ・声かけ週間及び月間の実施。
- ◇朝（出勤時）のあいさつ・声かけ運動の呼びかけ。
- ◇家庭教育、生涯学習におけるあいさつ・声かけの実施。

②地域、各団体における事業（既存事業等の活用）

地区対や町会が実施する事業のなかで、あいさつをテーマにしたイベントやあいさつを要素としたゲームを考案して行うなど、既存の事業を活用することは有効なことと考える。また、学校の公開授業に多くの地域の方々が参加をしているが、更に機会を増やし子どもたちとふれあう場を広げることが有効であると考え。そうしたときに単にあいさつを交わすのではなく、顔見知りになるという意識を持って、子どもたちと接することが大切である。

また、各地域において運動を効果的に進めるためには、小中学校の学期初めや「あいさつ週間」などの期間を年に数回設定するなど、継続性、反復性を持たせることにより地域への浸透と拡大を図っていく必要がある。

〔具体的な取り組みの例〕

- ◇既存事業へあいさつ・声かけの要素を盛り込む。
- ◇町会を通じた家庭へのあいさつ・声かけ運動の呼びかけ。
- ◇PTAを通じた親子でのあいさつ・声かけ運動の提唱。
- ◇商店街や区内事業所などを対象としたあいさつ・声かけ運動への協力依頼。

③各団体や事業に対する支援

各団体に対する支援として、団体が実施する事業において「あいさつ・声かけ」の啓発活動を行なう場合に、モデル事業を提示すること、また先駆的でかつ効果が上がる事業には物資の提供を行うことなどが考えられる。

アンケートの回答にもあるように声かけをする意思を持ちながら、不審者に間違えられることや子どもの反発を懸念して、ついしり込みしてしまうといった場合に、目印があると行動しやすいという意見がある。「3 区内における先駆的な取り組み」で述べた小学校の例でも明らかなように、運動に参加する人たちが身に着ける、一本の黄色いゴムのバンドが子どもたちに安心感を与えて地域の輪をつないでいるように、目印は非常に効果的であり、運動の方法の細部については地域で異なっても、全区で統一した目印を考えることが必要である。

また、各団体が「あいさつ・声かけ」を事業として実施する際に、連携をすることでより大きな効果が得られると考えられる場合には、団体間の連絡調整や情報提供などの支援が必要である。

〔具体的な取り組みの例〕

- ◇啓発用資材（運動参加者が着用する反射リストバンド、のぼり旗、懸垂幕、自動車装着用マグネットパネル等）の作成配付。
- ◇区ホームページを活用した先駆的事业の紹介や事業実施結果の報告。
- ◇先駆的にあいさつ運動を実施している学校や地域の例を、他の学校、地域に紹介し取り組みを促す。